

狂走団 川又千秋



狂走団
川又千秋
角川書店(文庫)
(10/30刊・¥260)

初の短篇集と聞くと、まっさきに「そうだったっけ」と思ってしまう。三年前に長篇を書き下しはじめるまでは、むしろ短篇作家のイメージがあったからだ。今でも、当時の雰囲気強く印象に残っている。

本書の収録作四篇は、各々『奇想天外』誌に掲載された。参考までに発表年を記してみると、「過熱した男」(八一年九月、改題)、「悪夢の狩人」(八一年五月)、「狂走団」(七九年十二月)、「芸夢E2」(七九年九月)となる。既にこの時期の短篇は、初期の夢幻的ストーリーの希薄なものと違って、物語のダイナミズムを内在させている。長篇冒険小説の川又千秋を読み慣れた読者にとっても、違和感なしに溶けこめる作品となっている。一気に押し切った感触のある七九年の作品と、余裕の見られる八一年の二篇を、読み較べるのも面白い。二年間に、作者の技法がどう変わったかが分かるだろう。例えば、七九年では、主人公の描写がやや強引で、直線的にすぎよう。もっとも、好みとすれば、一本の流れのある「狂走団」に暴力的な魅力があつてよい。コミカルな「過熱した男」が楽しかった。